

元暁と世親『無量寿経論』

辻本 俊郎

- 一、先行研究
- 二、元暁『無量寿経疏』に引用される『無量寿経論』
- 三、元暁と中華の詩
- 四、結論

キーワード：元暁、『阿弥陀経疏』、世親『無量寿経論』

一、先行研究

韓普光（泰植）¹は、元暁（西暦六一七年～六八六年）著『阿弥陀経疏』には世親（Vasubandhu 西暦四〇〇年～四八〇年）著・菩提流支（Bodhiruci）訳『無量寿経論』が引用されているが『無量寿経論』の偈と異なる偈が存在することを指摘している。また、桜部建²も、同様な指摘をし、それは『無量寿経論』の一異本であるのか、あるいは元暁が世親の願偈になぞらえて自作した偈をもって補ったのか、断案を得ないとしている。さらに、李正模³は、ここに見える偈は元暁が直接五言句を作って世親の論頌にしたのではないかと推測しているが、その根拠については何ら示していない。

これについて筆者は以前、拙稿⁴において検討を加えたことがある。そこでは、確定的に見る決め手があるわけではなかったため、第一説として元暁『阿弥陀経疏』に引用される『無量

寿経論』は、現存するその全く別系統のテキストからの引用である。第二説として元暁が自作した偈を補っている可能性もある、として学界に提出したことがある。しかしながら、近年になって畏友齊藤隆信の漢語仏典における興味深い研究⁵が発表され、この研究に基づいて上記に対する問題点を解決する糸口が見えてきた。したがって、本小論では、再度元暁『阿弥陀経疏』に引用される『無量寿経論』について元暁の偈に対する姿勢なども踏まえて、『無量寿経論』の一異本なのか、あるいは元暁の撰述なのかについて結論を下したい。

二、元暁『阿弥陀経疏』に引用される『無量寿経論』

さて、ここでは早速、元暁『阿弥陀経疏』に引用される『無量寿経論』を見ていくことにする。本小論で問題とする文言は便宜上ゴチックで示す。また、括弧内は現代語訳である。

・論説二乗種不生。⁶

（〔無量寿経〕論は、〔極楽浄土には〕二乗の種は生まれないと説く。）

・無諸難功德成就。如論頌言。永離身心悩受樂常無間故。（中略）莊嚴地功德成就。如論頌言。

¹ 韓〔一九九一〕一二〇頁～一二四頁。

² 桜部〔一九九四〕三三九頁。

³ 李正模（太元）〔二〇〇四〕二九六頁。

⁴ 辻本〔二〇〇九〕を参照されたい。

⁵ 齊藤〔二〇一三〕〔二〇一五〕は、両書とも漢語仏典の韻文資料に焦点をあてた研究書である。

⁶ 大正大蔵経三七卷三四八中。

雜華異光色宝欄遍圍繞故。(中略) 莊嚴水功德成就。如論頌言。諸池帶七宝淥水含八德。下積黄金沙上耀青蓮色故。(中略) 種種事功德成就。如論頌言。備諸珍宝性具足妙莊嚴故。(中略) 莊嚴妙色成就功德。如論頌言。無垢光焰熾明淨耀世間故。一妓樂功德。常住天樂虛。二宝地功德。黄金為地故。三雨華功德。六時雨華故。如論頌言。金地作天樂雨華散其間。歡樂無疲極晝夜未嘗眠故。(中略) 如論頌言。供養十方仏報得通作翼。愛樂仏法味。禪三昧為食故。(中略) 如論頌言。種種雜色鳥各各出雅音。聞者念三宝忘想入一心故。(中略) 如論頌言。大乘善根男等無譏嫌名女人及根欠二乘種不生故。(中略) 如論頌言。莊嚴虚空功德成就者。偈言無量宝交絡羅網虚空中。種種鈴發響宣吐妙法音故。(中略) 莊嚴性功德成就者。偈言正道大慈悲出生善根故。二者莊嚴性功德。(中略) 如論頌言。莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。(中略) 論云。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来淨華衆正覺華生故。(中略) 論言。何者莊嚴大衆功德成就偈言人天不動衆清淨智海生故。(中略) 言。何者莊嚴上首功德成就。偈言如須弥山王勝妙無過者故。(中略) 言。大乘善根男等無譏嫌名⁷。

(諸難がないという功德の成就とは、〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「永久に身心の悩みを離れ、樂を受けること常に間がない」と言えるが故に。(中略) 莊嚴たる地という功德の成就とは、〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「〔極樂淨土の〕様々な華は異光の色を放ち、宝欄はあまねく取り囲んでいる」と言えるが故に。(中略) 莊嚴たる水という功德の成就とは、〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「諸の池は七つの宝を運び、八種の特質をもった水がその中に満たされている。その下には金の砂が敷き詰められており、その上に青色の蓮の華が輝いている」と言えるが故に。(中略) 種種事という功德の成就とは、〔無量寿經〕論

の〔偈〕頌に「諸の珍しい宝の性質を備え、素晴らしい莊嚴を具えている」と言えるが故に。(中略) 莊嚴たる妙色という功德の成就とは、〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「けがれない光焰はさかんにして、明淨にして世間を耀かす」と言えるが故に。一には、妓樂という功德である。〔極樂淨土には〕常にすばらしい音楽が空〔中〕に〔響く〕。二には、宝地という功德である。黄金が大地となっているが故に。三には、雨華という功德である。〔晝夜〕六時に〔曼荼羅〕華が雨のように降るが故に。〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「〔極樂淨土の〕地は、金から出来ており、すばらしい音楽が〔聞こえ〕、その間に〔曼荼羅〕華が雨のように降って、〔極樂淨土の人々は〕歡樂し、晝夜にわたって眠らなくても疲れを感じない」と言えるが故に。〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「十方仏を供養するに、翼を有する鳥のように〔十方に〕行きわたり〔十方の仏たちに〕報いることを得、仏法の味と禪三昧とを愛樂することを食となす」と言えるが故に。(中略)〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「いろいろな美しい色をした鳥が、それぞれ美しい音色で鳴いている。〔それを〕聞くものは、三宝を念じ、一心に集中してそれ(三宝)を想うのである。」と言えるが故に。(中略)〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「大乘の善根の男は、等しく、譏嫌の名前は存在しない。女性と心身障害者と二乗の種は生まれない」と言えるが故に。(中略) 莊嚴たる虚空という功德の成就とは、〔無量寿經〕論の〔偈〕頌に「無量の宝が交じり合っており、羅網、虚空にあまねし。種の鈴は響きを發し、すばらしい法の音を宣吐する」と言えるが故に。(中略) 性という功德の成就とは、「正道と大慈悲という、出世の善根より生じる」と言えるが故に。二つには莊嚴たる性の功德である。(中略) 莊嚴たる清淨という功德の成就とは、偈に「觀ず

⁷ 大正三七卷三四九上～三五〇上。

る。かの世界の姿は、三界道を超えている」と言えるが故に。(中略) 莊嚴たる眷属という功德の成就とは、「如来の浄華衆は、正覚によって華に化生する」と言えるが故に。(中略) 何が莊嚴たる大衆という功德の成就かと言えば、「天と人となる、不動の衆、清浄智によって海のように生じる」と言えるが故に。(中略) 何が莊嚴たる上首という功德の成就かと言えば「須弥山王の、勝妙にして、過ぎるものないがごとき者は」と言えるが故に。(中略) 〔無量寿経論に〕言う。大乘の善根の男は、等しく、譏嫌の名前は存在しない)

この中で問題となるのが、次の四偈である。すなわち、

- ① 諸池帯七宝 渌水含八德 下積黄金沙 上耀青蓮色
- ② 金地作天楽 雨華散其間 歓楽無疲極 昼夜未嘗眠
- ③ 供養十方仏 報得通作翼 愛樂仏法味 禪三昧為食
- ④ 種種雜色鳥 各各出雅音 聞者念三宝 忘想入一心

これらの偈は、前述したとおり、『無量寿経論』には見られない偈なのである。しかし、元暁は、『無量寿経論』の偈として引用している。だが、世親『無量寿経論』として伝承される諸テキスト、すなわち、宋版(東禅寺版、開元寺版、思溪版、磧砂版)、高麗再雕版などの大蔵経テキストや房山雷音洞石刻本、雲居寺石刻本のみならず正倉院聖語蔵本、金剛寺一切経、七寺一切経、鎌倉光明寺寂恵書写本、京都常楽寺存覚書写本といった写本にも見出せず、さらには流布本にも一切見られない。さらに言えば、曇鸞(四七六～五四二)、浄影寺慧遠(五二三～五九二)、善導、迦才といった浄土系諸師や宗暁(一一五一～一二一四)、知礼(九六〇～

一〇二八)といった天台系諸師や華嚴系諸師にも『無量寿経論』の文が数多く引用されているが、元暁の引用した『無量寿経論』が全く見当たらないのである。これはいったいどうしたことであろうか。この事実は、元暁が『阿弥陀経疏』を著すのにあたって、『無量寿経論』をそのまま引用したのではなくて、この部分のみ自作した可能性がきわめて高いと思われるのである。

また、これらの内容を見ると、鳩摩羅什訳『阿弥陀経』に見られる浄土の情景を思い出させる。『阿弥陀経疏』のタイトルからして当然であろう。今、便宜的に『阿弥陀経』の叙述を記すと次のようになる。

- ① 極楽国土。有七宝池。八功德水。充滿其中。池底純以。金沙布地⁸。
(極楽浄土には、七宝で出来た池があり、八つの功德である水がその中に満ち満ちている。池の底には金の砂が敷かれている)
- ② 常作天楽。黄金為地。昼夜六時。而雨曼荼羅華⁹。
(常に妙なる音楽が奏でられ、大地は、黄金で出来ている。昼夜六時に曼荼羅の華が雨のように降る)
- ③ 供養他方。十萬億仏。即以食時。還到本国。飯食経行¹⁰。
(十万億と言われる他方世界の仏を供養し、そして供養し終わると速やかに極楽浄土に帰って食事を摂り散策する)
- ④ 彼国常有種種奇妙雜色之鳥。白鵠孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命之鳥。是諸衆鳥。昼夜六時出和雅音。其音演暢五根五力七菩提分八聖道分。如是等法。其土衆生。聞是音已。皆悉念仏念法念僧¹¹。
(かの極楽浄土には常に種々の美しい羽の色の異なった鳥がいる。それは白鵠、孔雀、鸚鵡、鶯鷺、妙音鳥、共命鳥などの鳥がいる。

⁸ 大正大蔵経一二卷三四七上。

⁹ 大正大蔵経一二卷三四七上。

¹⁰ 大正大蔵経一二卷三四七上。

¹¹ 大正大蔵経一二卷三四七上。

これらの鳥は、昼夜六回、温和にして妙なる鳴き声でさえずる。この鳴き声はみな五根、五力、七菩提分、八聖道などの一切の仏道修行の徳目を説いている。その国の人々は、この声を聞いて仏・法・僧の三宝を念じる)

元暁『阿弥陀経疏』に引用された『無量寿経論』と『阿弥陀経』を比較してみると、内容的によく合致していることが分かる。次にこれらの偈であるが、押韻しているか否かを調べてみよう。齊藤隆信¹²によると、世親著・菩提流支訳『無量寿経論』における偈は、視覚的には一句の字数を整えて、韻文の体裁を保っているが、声律や音律といったことも考えると決して詩とは言えないとし、さらには、節奏点の配慮もなく、割裂現象も見られることを指摘しており、これらのことから考えると押韻しているはずはないのであるが、果たしてどうであろうか。これらを音数律（一句の字数）、節奏点、韻律（句末の押韻）、声律（句中の平仄）の四点に絞って検討する。

括弧には『広韻』の韻目を記した。

- ① 諸池帶七宝 淥水含八徳（入徳）
下積黄金沙 上耀青蓮色（入職）
- ② 金地作天楽 雨華散其間（平山）
歓楽無疲極 昼夜未嘗眠（平先）
- ③ 供養十方仏 報得通作翼（入職）
愛楽仏法味 禪三昧為食（入職）
- ④ 種種雜色鳥 各各出雅音（平侵）
聞者念三宝 忘想入一心（平侵）

まず、音数律であるが、一句五字として韻文としての特徴が一応保たれている。

また、押韻であるが、①と②については押韻していないが、③と④については韻を踏んでいることが分かる。

次に節奏点であるが、次のようになっている。

- ① 諸池／帶七宝 淥水／含八徳（入徳）

下積／黄金沙 上耀／青蓮色（入職）

- ② 金地／作天楽 雨華／散其間（平山）

歓楽／無疲極 昼夜／未嘗眠（平先）

- ③ 供養／十方仏 報得／通作翼（入職）

愛楽／仏法味 禪三昧／為食（入職）

- ④ 種種／雜色鳥 各各／出雅音（平侵）

聞者／念三宝 忘想／入一心（平侵）

③の四句目のみは節奏点の配慮はないが、その他はすべてそれが守られているのである。つまりおおむね節奏点も配慮されていると言えるのである。ただし、③の四句目について節奏点が守られていないことについては③の三句目と四句目が『無量寿経論』の偈と同一のものであり、インド原典を漢訳する際にどうしても文意を優先して翻訳するのであるから、翻訳上の限界であろう。

次に声律を見てみよう。

平声を○、仄声を●で表した。

- ① 諸池（○）帶七（●）宝 淥水（●）含八（●）徳（入徳）
下積（●）黄金（○）沙 上耀（●）青蓮（○）色（入職）
- ② 金地（●）作天（○）楽 雨華（○）散其（○）間（上山）
歓楽（●）無疲（○）極 昼夜（●）未嘗（○）眠（下先）
- ③ 供養（●）十方（○）仏 報得（●）通作（●）翼（入職）
愛楽（●）仏法（●）味 禪三（○）昧為（○）食（入職）
- ④ 種種（●）雜色（●）鳥 各各（●）出雅（●）音（下侵）
聞者（●）念三（○）宝 忘想（●）入一（●）心（下侵）

ここでは、音声の高低による語の配列の規則、すなわち、平仄が配慮されていないのである。

またいで詞彙が配置されていることを指摘している。

¹² 齊藤〔二〇一三〕一一八頁～一一九頁。ここでは、無量寿経論の偈は九六句あるが、その中の六句が句間を

しかしながら、③④の偈は韻を踏んでいる、お
おむね節奏点が守られているということから考
えて完全ではないけれども、一応中華の詩とし
て文学宗教作品であると認められるのではない
だろうか。また、『無量寿経論』の偈は無韻、
節奏点が保たれておらず、割裂現象をおこして
いるのに対して、ここで問題とする偈のみが韻
律の配慮が施されていることは極めて不自然で
あると言える。

三、元暁と中華の詩

ここでは、元暁の伝記や著述などに見られる
詩を採りあげて元暁の作った詩について考察を
加えたい。

元暁の著作は散逸されているものが多いた
め、はっきりとした数字は確定していないので
あって、研究者によってまちまちであるがおよ
そ七二部～九八部数えられる¹³。その中で元暁
著作であると考えられて、全文、あるいは一部
現存するものは、

- (一) 『涅槃経宗要』
- (二) 『法華経宗要』
- (三) 『金剛三昧経』
- (四) 『両卷無量寿経宗要』
- (五) 『阿弥陀経疏』
- (六) 『弥勒上生経宗要』
- (七) 『菩薩戒本持犯要記』
- (八) 『起信論疏』
- (九) 『大乘起信論別記』
- (一〇) 『大乘起信論疏記会本』
- (一一) 『大慧度経宗要』
- (一二) 『大乘二障義』
- (一三) 『発心修行章』
- (一四) 『遊心安楽道』
- (一五) 『大乘六情懺悔』

- (一六) 『十門和諍論』
- (一七) 『華嚴経疏』
- (一八) 『解深密経疏』
- (一九) 『梵網経菩薩戒本私記』
- (二〇) 『因明論判比量論』
- (二一) 『中辺分別論疏』

が挙げられよう。しかし、残念ながらこれらの
中には元暁自作の詩は全く確認できない。また、
これらの他には元暁著作の引用している諸師も
多数存する。中国、韓国の諸師に限定してあげ
ると、

- (一) 法蔵（六四三～七一二）『華嚴経探玄
記』、『大乘起信論義記』
- (二) 李通玄（六三五～七三〇頃）『新華嚴
経論』
- (三) 慧苑（六七三～七四三頃）『続華嚴経
略疏刊定記』
- (四) 澄観（七三八～八三九）『大方広仏華
嚴経疏』、『新訳華嚴経七処九会頌釈
章』、『大方広仏華嚴経随疏演義鈔』
- (五) 宗密（七八〇～八四一）『起信論疏註』
- (六) 子璿（九六五～一〇三八）『起信論疏
筆削記』、『金剛経纂要刊定記』
- (七) 鮮演（一一世紀）『大方広仏華嚴経談
玄決沢』
- (八) 志福（一二世紀初頭）『釈摩訶衍論通
玄鈔』
- (九) 観復（一二世紀）『華嚴演義鈔会解記』
- (十) 師会（一二世紀）『般若心経略疏珠記』
- (十一) 慧沼（六五〇～七一四）『成唯識論
了義燈』、『金光明最勝王経疏』
- (十二) 定賓（八世紀）『理門論疏』
- (十三) 良賁（七一七～七七七）『仁王護国
般若波羅蜜多経疏』
- (十四) 湛然（七一一～七八二）『止観輔行
伝弘決』

¹³ 韓前掲書八三頁～九五頁、福士〔二〇〇四〕一二九頁

～一八四頁に詳しい。

- (十五) 明空(生没年不明)『勝鬘經疏義私鈔』
- (十六) 延寿(九〇四～九七五)『宗鏡錄』、『万善同歸集』
- (十七) 知礼(九六〇～一〇二八)『金光明經文句』
- (十八) 袁宏道(明代末)『西方合論』
- (十九) 玄一(新羅時代)『無量寿經記』
- (二十) 憬興(六二〇～七〇〇頃)『三弥勒經疏』、『無量寿經連義述文贊』
- (二十一) 通倫(八世紀初頭)『瑜伽論記』
- (二十二) 表員(生没年不明)『華嚴經文義要決問答』
- (二十三) 大賢(八世紀)『梵網經古述記』、『成唯識論學記』、『大乘起信論内儀略探記』
- (二十四) 見登(八世紀)『大乘起信論同異略集』、『華嚴一乘成仏妙義』
- (二十五) 均如(九二三～九七四)『一乘法界図円通記』、『釈華嚴旨帰章円通鈔』、『華嚴三寶章円通記』、『釈華嚴教分記円通鈔』
- (二十六) 佚名『法界図記叢髓録』
- (二十七) 知訥(一一五八～一二一〇)『勸修定慧結社文』、『法集別行録節要並入私記』、『円頓成仏論』、『看話決疑論』、『華嚴論節要』
- (二十八) 瑞龍(生没年不明)『南明泉和尚頌証道歌事實』
- (二十九) 普幻(生没年不明)『首楞嚴經環解刪補記』
- (三十) 性聡(一六三一～一七〇〇)『大乘起信論疏筆削記会編』

などである。

この中でただ一例のみであるが、(二十七)知訥『法集別行録節要並入私記』には元曉の詩として引用されているのである。すなわち、

乃往過去久遠世 有一高士号法藏
初發無上菩提心 出俗入道破諸相
雖知一心無二相 而愍群生没苦海
起六八大超誓願 具修淨業離諸穢¹⁴

(昔、過去の久遠の世に、一人の高士がいて名を法藏という。初めて無上の菩提心を起こし、俗世を出て道に入り、諸の相を破る。ただひたすらに二相がないことを知るといっても、苦海に没する衆生を憐れんだ。六十八(意味的に言えば四十八の誤り)の大きく超えた誓願を起こして、具に淨業をおさめ、諸の穢れを離れる。)とある。この詩は音数律(一句の字数)、節奏点、韻律(句末の押韻)はどうであろうか。括弧には『広韻』の韻目を記した。

乃往過去／久遠世 有一高士／号法藏(平唐)
初發無上／菩提心 出俗入道／破諸相(平陽)
雖知一心／無二相 而愍群生／没苦海(上海)
起六八大／超誓願 具修淨業／離諸穢(去發)

このようにこの詩は全く押韻させる配慮などないことがわかる。しかしながら、音数律は一句七字として韻文としての体裁が一応保たれて、また、節奏点の配慮もなされていることだけは言えよう。

次に元曉の伝記より見てみることにする。福士によれば、現在、元曉に関する史料は、韓国史料として、次の二四を挙げることができるようである¹⁵。

- (一) 『新羅誓幢和尚塔碑』
- (二) 『忠州月光寺円朗禪師大宝禅光塔碑』
- (三) 『瑞山普願寺法印国師宝乘塔碑』
- (四) 『新編諸宗教蔵総録』・『円宗文類』・『大覚国師文集』
- (五) 『三国史記』
- (六) 『芬皇寺和諍国師碑片』
- (七) 『破閑集』
- (八) 『補閑集』

¹⁴ 韓国仏教全書四卷七五三上。

¹⁵ 福士〔二〇〇四〕三一頁～一一九頁を参照のこと。

- (九) 『東国李相国集』
- (一〇) 『三国遺事』
- (十一) 『高麗史』
- (十二) 『東文選』
- (十三) 『梅月堂詩集』
- (十四) 『新增東国輿地勝覧』
- (十五) 『東京雜記』
- (十六) 『東師列伝』
- (十七) 『奉恩本末志』
- (十八) 『三聖山三幕寺事蹟』
- (十九) 『楡岾寺本末寺誌』
- (二十) 『乾鳳寺及乾鳳寺末寺史蹟』
- (二十一) 『孔雀山水墮寺事蹟』
- (二十二) 『三和寺重修記』
- (二十三) 『天竺山仏影寺記』
- (二十四) 『江原道淮陽府金剛山長安寺事蹟』

この中で元暁の自作の詩と思われるものは、わずかに二例であるけれども（一〇）『三国遺事』と（十二）『東文選』に見出すことができる。まず一然（一二〇六年～一二八九年）撰『三国遺事』であるが、『三国遺事』は韓半島における現存する最古の歴史書『三国史記』（西暦一一四五年完成）に次ぐ書物である。しかし、歴史書としては問題点もあるが、元暁の伝記を記した資料は乏しいこともあって、基本的な文献として位置づけられている¹⁶。

『三国遺事』には次のような叙述が見られる。元暁住磻高寺時。常住謁智。令著初章観文及安身事心論。暁撰訖。使隱士文善奉書馳達。其篇尾述偈云。西谷沙弥稽首礼。東岳上徳高巖前。吹以細塵補鷺岳。飛以微滴投龍淵¹⁷。

とあり、元暁が、朗智の勧めに応じて、『初章観文』や『安身事心論』を著述した後、偈を創作したとある。ここも「偈云」とありながらも散文のような行取りとなっている。つまり散文

形態の行取りの中であって、韻文が混在しているのである。したがって、これを、韻文としての行取りに改めてみると、

西谷沙弥稽首礼 東岳上徳高巖前
吹以細塵補鷺岳 飛以微滴投龍淵

となる。この偈もそうであるが、前掲の詩も散文の行取りのまま提供されているのは、『三国遺事』の作者である一然が、偈としての評価する姿勢がなかったことを意味するのではないだろうか。この偈は、元暁（西谷沙弥）が、東岳にいる朗智の徳が高いことに対して、自ら狭量なることを記した偈である。この偈を詳細に見ていくと、

西谷沙弥／稽首礼 東岳上徳／高巖前（平先）
吹以細塵／補鷺岳 飛以微滴／投龍淵（平先）
となっており、旋律の基点となる節奏点も守られ、なおかつ韻も踏んでいることが分かるのである。では、平仄はどうであろうか。すなわち、
西谷（●）沙弥（○）稽首（●）礼
東岳（●）上徳（●）高巖（○）前
吹以（●）細塵（○）補鷺（●）岳
飛以（●）微滴（●）投龍（○）淵

となっており、それぞれ下の句では平仄の配慮は見られない。節奏点、押韻という観点からすると、サンスクリット語原典より中国語訳に翻訳する漢訳仏典とは異なり、言語転換の労苦が不必要であることから、漢語に造詣の深い元暁にとってみれば、韻律や節奏点などに配慮した偈を創作することはそれほど困難なことではなかったと思われる。

また、（十二）『東文選』には、次のようにある。すなわち、

唱元暁澄性歌云。
法界身相難思義 寂然無為無不為
至以順彼仏身心¹⁸

¹⁶ 八百谷孝保〔一九五二〕（『新羅僧元暁伝攷』『大正大学学報』三八）は、『三国遺事』の元暁に関する記述は史実に忠実であるとしている。

¹⁷ 大正四九卷一〇一三頁中。

¹⁸ 卷一一七疏、国訳東文選九一五八〇頁。

（法界の身相は不可思議であり、寂然となすこともなく、なさざることもない。かの仏の身心に従うことに至る）

では、この詩は音数律、節奏点、韻律はどうであろうか。

法界身相／難思議（去賓）

寂然無為／無不為（平支）

至以順／彼仏身心（平侵）

この詩はどのようなわけは奇数句である。通常、漢詩というものは、その多くは偶数句から成り立っている。したがって、もとは偶数句であったものが、引用される際にあるいは、転写される場合に一句が欠落してしまった可能性があるのではないか。ただこの詩は節奏点、韻律は意識されず、音数律のみがかろうじて保たれているのである。

以上のように、元暁の自作の詩として伝承される用例を三例採りあげてみてきたが、知訥『法集別行録節要並入私記』に引用された詩では、押韻は守られず、節奏点が保たれ、『東文選』に見られる詩は、押韻も節奏点も守られていない。しかし、『三国遺事』に見られる詩一例のみであるがから節奏点を配慮し、押韻した詩であることが明らかとなったので、元暁には詩を作る漢語能力が十分に備わっていた証左といえるのではないか¹⁹。

四、結論

以上のことから考えると、わずか一例のみ確認できたのであるが、元暁は漢語に熟達するのみならず、韻律、節奏点、押韻といった中華の詩を作る教養をも具えていたことが明らかであ

り、本小論で問題としている偈は、平仄の配慮がないものの、①音数律（一句の字数）が保たれていること、②おおむね節奏点が守られていること、③完全ではないが韻を踏んでいること、という点から考えて菩提流支訳『無量寿経論』の一異本ではなく、鳩摩羅什訳『阿弥陀経』の内容を元暁が『無量寿経論』の偈として創作したのではないかと考えられるのである。

では、なぜ元暁が、この四偈のみを『無量寿経論』からの引用としたのであろうか。これに関しては今後の課題としたい。

参考文献

- 恵谷隆戒『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976
大島正二『中国言語学史 増訂版』汲古書院、1998
大島正二『漢字と中国人—文化史をよみとく—』岩波新書、2003
大島正二『中国語の歴史—ことばの変遷・探究の歩み—』大修館書店、2011
大竹 晋『新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論 他』大蔵出版、2011
韓普光（泰植）『新羅浄土思想の研究』東方出版、1991
韓泰植（普光）「新羅・元暁の弥陀證性偈について」『印度学仏教学研究』第四三巻第一号、1994
金勲大阪経済法科大学アジア研究所研究叢書一〇『元暁佛学思想研究』大阪経済法科大学出版部、2002
金彊模（雲学）「新羅元暁の文学観」金知見 蔡印幻編『新羅佛教研究』山喜房仏書林、1973
齊藤隆信『漢語仏典における偈の研究』法蔵館、2013
齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』法蔵館、2015
桜部建「阿弥陀経—真実の名のり<阿弥陀>—」『浄土仏教の思想』第一巻 講談社、1994
章耀玉「新羅の浄土教」『浄土仏教の思想』第六巻 講談社、1992
辻本俊郎「『無量寿経論』テキスト考」『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所、1999
辻本俊郎「『遊心安楽道』の著者について—『無量寿経論』を手がかりとして—」『アジア学科年報』第一号、

¹⁹「蛇福不言条」に次のようにある。

時元暁住高仙寺。暁見之迎礼。福不答拜而曰。君我昔日駄經牝牛。今已亡矣。偕葬何如。暁曰諾。遂与到家。令暁布薩授戒。臨尸祝曰。莫生兮其死也苦。莫死兮其生也苦。（大正四九卷一〇〇七中）。

ここでは「臨尸祝曰」と前置きされていながら、これ

に続く文章が韻文ではなく、散文としての行取りとなっているのである。これを以下のように韻文としての行取りに改めてみると、七言の音数律によって一句をなす韻文であることが明らかとなる。

莫生兮其死也苦（上姥）

莫死兮其生也苦（上姥）

2007

辻本俊郎「元暁『阿弥陀経疏』における『無量寿経論』」
『アジア学科年報』第三号、2009

辻本俊郎「『無量寿経論』とBodhiruci」『アジア学科年報』
第四号、2011

坪井俊映『浄土三部経概説 新訂版』法蔵館、1996

福士慈稔『新羅元暁研究』大東出版社、2004

古川末喜『初唐の文学思想と韻律論』知泉書館、2003

源弘之「新羅浄土教の特色」金知見 蔡印幻編『新羅
佛教研究』山喜房仏書林、1973

李正模（太元）「元暁の一心観と浄土観について」高橋
弘次先生古稀記念論集『浄土学佛教学論叢』＜第二
巻＞ 山喜房仏書林、2004